

第5回 パラスポーツの振興と
バリアフリー推進に向けた懇談会

—議事録—

日時：令和7年12月18日（木）14時00分～15時00分

場所：東京都庁第一本庁舎7階 ホール

【事務局】

それでは、定刻になりましたので、第5回パラスポーツの振興とバリアフリー推進に向けた懇談会を開会いたします。

開会にあたりまして、座長の小池知事よりご挨拶を申し上げます。知事よろしく申し上げます。

【小池知事】

はい。皆様こんにちは。ご無沙汰いたしております。いろいろなイベントで皆様方にはご協力いただいております。改めて御礼を申し上げます。

パラ応援大使の皆様方には、まず東京2020大会、そしてその後の世界陸上があって、そして先日のデフリンピックと、それぞれで応援をしていただきましてありがとうございます。大変盛り上がったそれぞれの大会でございました。

そしてパラスポーツの魅力、またバリアフリーの発信などについても、日頃から様々な発信をしていただいている皆さんであります。ありがとうございます。

一連のこの国際大会を通じて、スポーツの力、また人の力の大きさ、これを改めて実感をしたところでございます。

先日のデフリンピックでございますけれども、子供たちが観覧する、応援をする機会を提供させていただいて、約5万人の小さなお子さんに目の前で繰り広げられるスポーツを実際に見ていただいたという、きっと忘れ得ぬ思い出になっているかと思います。

それから、多くの方々にご参加の方は無料とさせていただいたわけでございますけれども、大変な盛り上がりで、28万人が実際に会場で応援をしていただいたということでもあります。

それから応援のときのひらひら、エール、「行け！」ですね。これもですね、みんな普段でも使うようになったりして大変盛り上がりました。

デフアスリートの皆さんが、本当に普通の競技でもそのままメダルが取れそうな方もいらしたりとか、もうすごいですよね。限界に挑む方々のこのパフォーマンスというのは本当に胸を打つところがたくさんございます。

いずれにしましても、障害があるなしに関わらず、また国籍、性別関係なく、スポーツでもって人が繋がっていくということは、まさに共生社会の一つの姿だと思っておりますし、またせっかく盛り上がっている機運をですね、ただ一過性に終わらせるというのではなくて、社会全体で次の世代へとバトンを繋ぐことが重要でございます。

そこで本日のこの懇談会でございますけれども、世界陸上とデフリンピックのレガシーを未来へ繋ぐということをテーマにして、そして世界陸上、デフリンピックでの取組の感想も含めて、大使の皆様方のご意見を伺いたくお集まりいただいたところでございます。

引き続きどうぞ皆様方のお力添えよろしくお願い申し上げます、冒頭のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

【事務局】

はい。ありがとうございます。

続きまして、名誉顧問の谷垣禎一様からご挨拶を頂戴いたします。谷垣様よろしく願いたします。

【谷垣 禎一様】

こんにちは。今年は今知事からお話がありました世界陸上やそれからデフリンピックが開催されまして、私も初めはデフリンピックっていうのは、パラリンピックの何か一種かなぐらいの認識しかなかったんですけども、いろいろテレビなどで拝見させていただくと、サインエールっていうんでしょうか？ああいう応援されますとね、やっぱりそれに応えてまた選手の方々が反応されてっていうようなシーンもありまして、素晴らしい大会を東京で持つことができたなど、もう心から喜んでおります。

それにつけても、今までこのデフリンピックは何かっていうことも知事からお話がありましたように、そんなに日本人が知っていたわけではないんで、これをするにはいろんな方の、単に障害を持っている方だけじゃなくて、いろんな方のご努力があって、やっと実現したことじゃないかとそういう思いを強くしたわけでございます。

今もお話がありましたように、やっぱりあの大会の中で、サインエールっていうんでしょうか、あれをやるとみんなが一体になって、応援して、そしてまたアスリートたちがそれに応える形でやっぱりすごいプレーをしてくれたなど、これは大きな東京にとっても日本にとってもレガシーじゃなかったかなと思うんです。

私もこういう体になりましたから、自分のやっていたスポーツだけでなく、いろんなところにパラスポーツや何かで関係を持つことができたわけですけど、いろんなことを振り返ってみますと、結局スポーツっていうのはやっぱり好きだからやるというのが根本にあって、嫌いじゃなかなかできないと思うんですね。

しかしその好きなことが実現できるためにはどうしたらいいかということになりますと、やっぱり何て言うんでしょうか、いろいろな方のスポーツを続けられる環境をどうやって作っていくのかっていうのも、1人でできるわけじゃありませんし、大勢の方の努力が必要だと、環境を整えていくということですね。

それからやっぱり私も障害者になって感じたんですが、自分が感じたことを発信していくっていうのも、私みたいな図々しい人間でも結構勇気がいるわけですね。なんだお前甘えてるとか言われなとか、そういうやっぱり勇気がいります。

それは結局のところ、私もその政治をやってきて考えてみますとね、障害者か健全者かに限らず、自分の思ってることをやっぱり言える社会っていう自由な社会っていうのはないと、なかなか先へ進まないんじゃないかっていう思いをですね、今回の行事を通じて私感じたわけでございます。

この懇談会はパラスポーツの振興とバリアフリー社会を作っていくというそういう懇談会だと思いますが、東京 2020 のパラリンピック、それから今度の世界陸上そしてデフリンピックと、これは知事始め皆さんそうしてくださると思いますが、やっぱり日本の持ってるレガシーとして定着させていかなきゃなんないです。

バリアフリー社会とパラスポーツの振興というものを図って、それが大風呂敷を広げますがやっぱり自由で、誰もが暮らしていける社会を作る。これは大変な道ですけれど、その大きな一步にできるんじゃないかなと。そのために私なんかもできることは限りがありますけれど、一步ずつ、一挙にやろうとしてもできませんから、一步一步進んでいくということが大事なのかなと、こんなふうにまあつまらぬ感想を申し上げました。ありがとうございました。

【事務局】

はい。谷垣様ありがとうございました。

それでは続きまして東京都の取組についてご報告いたします。モニターの方をご覧いただければと思います。

報告事項はパラ応援大使の活動報告、世界陸上、デフリンピックにおける都の取組、都におけるバリアフリー化の主な進捗状況です。

次のページに移ります。

報告事項の 1 点目、パラ応援大使活動報告でございます。

大使の皆様には、世界陸上、デフリンピックや関連イベントへご参加いただき、SNS 上での発信等により、パラスポーツとバリアフリーの普及、あるいは大会の盛り上げに大変寄与していただきました。ありがとうございました。

次のページです。

世界陸上、デフリンピックに向けて応援メッセージを頂戴しまして、SNS での総合発信等にご協力賜りました。競技会場や選手宿泊施設等でもメッセージを紹介いたしました。

次のページに移ります。

この他にも、大使の皆様にはパラスポーツの普及ですとか、バリアフリー推進に係る様々なイベントで、活動いただいております。

次のページです。

世界陸上、デフリンピックにおける都の取組についてでございます。

世界陸上、デフリンピックはスポーツの力を改めて実感する大会となったと思います。

障害のあるなしに関わらず、多くの方に会場へお越しいただきましたが、子供たちの大会への参画として、世界陸上リアル教室や、先ほどご覧いただきましたが、障害のある子供たちの分身ロボット遠隔操作など、スポーツを身近に感じ幅広く参画できる取組を行いました。

次のページです。

競技会場では、先ほど体験いただいた目で見える応援サインエールにより、聞こえない聞こえないに関わらず観客一丸となって選手を応援することで、これまでにない一体感を生み出すことができたものと考えています。

また、先ほどはスマートグラスを見ていただきましたが、いつでもどこでも誰とも繋がるユニバーサルコミュニケーション技術を活用することで、音が見える、音を感じる競技観戦の場とすることができました。

次のページです。

世界陸上、デフリンピックの開催期間を中心に、オールウェルカム TOKYO として、芸術文化の鑑賞サポートなどアクセシビリティ向上の機運を一層高めるキャンペーンを実施いたしました。さらに、デフ・スペシャルとして、駅やホテル、商業施設においても、ユニバーサルコミュニケーション技術等を活用したおもてなしを展開いたしまして、大会後の継続的な取組に繋がっているところでございます。

次のページでございます。

報告事項の3点目、バリアフリー化の進捗についてでございます。

2020大会や世界陸上、デフリンピックなどの国際大会の開催は都市を大きく進化させます。

ハード面のバリアフリーにつきましては、鉄道駅におけるホームドアの整備、都道のバリアフリー化、無電柱化など、まちの面的なバリアフリーを推進しております。

また、宿泊施設のバリアフリー化、公共交通におけるUDタクシーやノンステップバスの普及などを促進しております。

次のページです。ソフト面におきましても、情報バリアフリーの取組として、聴覚障害者の方のコミュニケーションを支援するとともに、心のバリアフリーの普及に向け、ホームページを通じた情報発信など、様々な取組を進めております。

次のページです。

最後に、2021 年の東京 2020 大会で生まれたレガシーは、今年の二つの国際大会に受け継がれ、さらに発展しているものと考えております。

パラ応援大使の皆様におかれましては、様々な分野において幅広く活動いただきました。

東京大会の開催から来年で 5 年となりますが、スポーツの力を通じて、インクルーシブなまち東京が実現していくよう、大使皆様のお知恵やお力をぜひお貸しいただけると幸いです。

取組の報告は以上でございます。

引き続きまして、意見交換の部に移りたいと思います。

次のページです。

今回の意見交換に先立ち、事前にアンケートを実施、大使の皆様にご回答いただきました。

次のページです。

まず一点目、世界陸上、デフリンピック両大会を通じて印象に残ったことにつきましては、大会観戦に関して、子供たちへの企画が素晴らしい、満席の観客と歓声の大きさが今でも耳に残っている、音がなくても通じ合う選手たちの姿に感動しスポーツの持つ力を実感したなどといったご意見をいただいております。

また、大会を取り巻く環境について、翻訳パネルなど最新のテクノロジーに驚いた、デフリンピックを見に来る観客が多く 2019 年のパラスポーツを取り巻く環境と全てが違ってきたといった意見がございました。

次のページです。

続いて 2 点目、両大会のレガシーについて、未来の東京にどのように受け継いでいくべきかという質問につきましては、更なるスポーツ活性化という点で、競技を見て生まれるスポーツへの関心を日常的なスポーツ行動に繋げていくことが必要などのご意見がございます。

また、共生社会の推進について、子供たちへの取組を通じて、スポーツ振興や障害に対する理解も深まる、2020 大会前に比べて障害者スポーツ関連イベントも増え身近になってきたといったご意見がございました。

次のページです。

続いて3点目でございます。東京パラリンピック5周年に向けた大使の活動、発信のアイディアにつきましてですが、パラスポーツをさらに盛り上げていく活動や、競技の魅力を発信して観戦のハードルを下げていきたいといった意見がございました。

また、国内の各種大会でも国際大会と同様に出会え、支援できる広がりが必要など、様々なご意見をいただきました。

ここまでアンケート結果をご紹介させていただきました。

資料をちょっと駆け足で恐縮でございますが、説明は以上となります。アンケートへのご協力ありがとうございました。

それでは早速ですが、皆様のご意見をお聞かせいただければと思います。

こちらから順番にご指名させていただきますので、「世界陸上とデフリンピックのレガシーを未来へ繋ぐ、更なるパラスポーツ振興とバリアフリー推進に向けて」をテーマにご発言いただければと思います。先ほども取組紹介していただきましたけれども、取組紹介を通じて気づいたことがあればあわせてご発言をお願いいたします。マイクについては事務局の方で操作いたしますのでそのままご発言をお願いいたします。

まず三浦様、お願いできますでしょうか。

【三浦 浩様】

パワーリフティング三浦です。こんにちは。

世界陸上、そしてデフリンピックを観戦させていただいて、スポーツが持つ力はやっぱり記録や勝敗の中に人と人を繋ぐ、力の強みを改めて感じました。

また、世界陸上では、国立競技場で満席の観客と歓声が選手の背中を押して会場全体がライブ会場のように一つになって応援していく、この光景がやっぱり未だに僕は忘れられません。

デフリンピックでは、やはり音がないからこそ生まれる視線やジェスチャー、表情による深いコミュニケーション、それが気持ちを伝える姿がこの大会の魅力でもあるとすごく感じました。

バレーボールでは選手が独自のサインエールを送って日本選手を送っていた、応援していたっていうのもすごく印象的でした。

あとは皆さんで観客席からサインエールを送ってる姿、これもすごく見ていて綺麗に思いました。

あと私ごとですけれども、東京オリパラ、それから世界陸上、デフリンピックを体験して、見えなくても支え合える、会えなくても支え合える、見えなくても信じ

あえる、聞こえなくても伝え合える、何かそういうことをこの一連の大会で改めて感じさせていただきました。

スポーツはやっぱり未来を創る力の一つで、東京が招致して国際大会は多様性も重視し、支え合う社会をも作ってくれています。

この貴重なレガシーを一過性のものとせず、持続可能な形で未来に繋げられるようにパラ応援大使活動として参加できることをすごく感謝しておりますし、これからも続けさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

【事務局】

はい。三浦様ありがとうございました。

次に葭原様お願いいたします。

【葭原 滋男様】

葭原と申します。

私もデフリンピックいろんな形で関わらせていただきまして、本当にいろんなテクノロジー、音や振動を使っていくテクノロジーっていうのはすごく感動しました。

また駒沢大学駅で駅を降りたときに手話で会話している方たちが非常に多くて、その辺は日頃見ない姿で非常にわくわくさせていただきました。

こういう中でやはりスポーツを楽しみたいっていう人もどんどん増えてきたと思います。そこで一つ私が最近体験した事例を紹介したいと思うんですけど、それは民間が運営しているスポーツジムの利用、その辺についてです。

健康への関心が高まる中で、身近なところに気軽にトレーニングできる施設というのがどんどんどんどん増えてきているかと思います。非常に良い流行だと感じています。

しかしながらですね、視覚障害がある私にとって、そこを1人で利用するというのは非常に困難なところが多いです。

安全の確保だとか、他の方に迷惑かけてしまうんじゃないかっていう不安があったり、そうするとやっぱり誰かと一緒に行くっていうのがやっぱり施設にとっても自分にとっても安心できる環境なのかなと思ってます。

ただそこに非常に大きな問題がありまして、ある施設ではスポーツジムの入場ゲートが顔認証で登録されていて、認証していないと入場ができないというところで、私が同行援護を使ってその都度違うガイドの人と利用するっていうことができないという状況が発生しました。

もう一つはですね、Web サイトから会員登録をして友人と施設に行ったとき、受付で白杖持ってる人は受け付けませんよと言われてしまい、さらにその場で登録抹消されてしまったと。

これ障害者差別解消法の観点からも絶対差別に当たるなというところで、都の権利擁護センターですかね、そちらに相談していろいろ対話を通してやっぱりそれは差別だということを先方も認識していただきまして、ガイドの方と一緒に利用を認めるという判断をしていただきました。

しかしガイドの人もやっぱり会員登録をしてもらわないと困るというところは譲っていただけませんでした。

それは1年ほど前からいろいろやってきたんですけど、結局その都度誰が介助してくれるかわからない私にとっては、利用するのは断念せざるを得ないという状況になってしまいました。

このような事例って結構いろんな方が経験しているのではないかなと思っています。障害者差別解消法が制定されて民間企業でも義務化されてきていると、その中でやっぱりこういう現状があるのかなと思っています。

1人1人がそれに立ち向かっていくっていうのは非常に大変だと思います。やっぱりその辺を改善して気軽に誰でもスポーツを楽しめる環境っていうのを作っていくってことが必要なんだろうなと、その辺では知事の力添え、必要なんだろうなと思っています。以上になります。ありがとうございました。

【事務局】

はい。葭原様ありがとうございました。

次に瀬立様お願いいたします。

【瀬立 モニカ様】

こんにちは。パラカヌーの瀬立モニカです。本日よろしくお願いします。

私自身は東京パラリンピックに選手として参加して、そして世界陸上は観客として見に行って、デフリンピックは少し予定が合わなくてオンラインでの観戦になったんですが、いろんな楽しみ方というのをさせていただきました。

スポーツイベントはするだけではなくて見る、支える、これらいろんな関わり方があって、それぞれの楽しさっていうものがあるんだなと改めて感じ、世界陸上では応援の声がウェーブとなって会場を回るんですね。選手たちが5000mのレースで周回をするたびに、そのウェーブと一緒に回っていく姿っていうのは、やっぱり現地で観戦したからこそわかることでもあり、それらを通して観客日本の人たちが一体となって何かこう喜びを共有したりっていうところに、スポーツの魅力というのを改めて感じました。

また、この特別なスポーツイベントが5年の間にたくさん続き、これから今後に向けて私達の日常の生活に落とし込んでいかなきゃいけないっていうところで、先ほど葭原さんがおっしゃっていたように、私自身もジムを使うことがよくあるんですが、そのときに1日だけ、1回だけウエイトがしたいだけなのに、サポートの人

の分のお金まで払ってパンプアップしなきゃいけない、1回パンプアップするのに1万円かかるのかっていうふうになると、障害を持った方が外に出るきっかけっていうのが減ってしまうのではないかなと私自身も思っています。

いろんな方たち、障害だったり何かハンデというか、ネガティブな要素を持った方々が外に出るためには、そういったハードルを下げていくことが必要になると改めて感じています。ありがとうございます。

【事務局】

はい。瀬立様ありがとうございました。

次に花岡様お願いいたします。

【花岡 伸和様】

はい。よろしくお願いします。花岡です。

私、世界陸上は会場に行って、満員の観客の声援にも感動しましたし、もちろん選手たちのパフォーマンスにも感銘を受けたんですけども、2021年の東京パラリンピックで私、国立競技場で解説の仕事をしておりましたので、やはり無観客の競技場で解説をしていたときの空気とその世界陸上の空気とどうしても比べてしまったんですよね。

悔しくもあり、また仇を取ってもらったような気持ちもあったんですけども、非常に注目度の高い大会だったなというふうに考えております。

エンターテインメントとしては非常に大成功したんだろうなというふうに思っております。

一方デフリンピックの方はそういった空気感にならないって思っていたんです。おそらくここにいらっしゃる皆様、あの会場に観客が並ぶ様子なんて想像されてなかったんじゃないかなと思うんですよね。

それが蓋を開けてみたら、もう観客が入れない会場が続出するというような状況で、その分やはり現地でのオペレーションが回らないっていうような声も聞いていたのは確かです。

けれどもポジティブなところで見えていくと、まだまだ注目度の低い観客を集めることが難しいパラスポーツにとっては、デフリンピックで起きたことの分析みたいなものがあれば集客に繋がるんじゃないかなと思っています。

何が良かったからあれだけお客さんが来たのかっていうところを、デフリンピックから学ぶのがレガシーの一つになるかなというふうに思っております。

やはりあれだけ注目度が上がりましたから、当然障害のある子供たちがスポーツに興味を持っているのが今だと思うんですが、まだまだ普及育成という部分では受け皿も少ないですし、経済的な部分の支援というのもトップアスリートに比べると

普及育成はあまりお金がつかないというのがどの競技でもありますので、そこを埋めていただくのが非常に大事なかなと思っております。

あともう一つは、障害のない人たちに対してももっとアピールできるなというふうにも思っておりますので、そのときにどうしてもパラスポーツであつたりとか、障害を想起させるようなワードが入っているとあんまり人が集まらないっていう。

障害のない人も来ないし、障害のある人でも自分はスポーツには関係ないと思ってる人が来なかったりするんですが、そのあたりはちょっとパラ陸上のイベントで言うと、みんなで楽しむスタジアムっていうものを今年やってみたんですけども、そうするとやはり障害のない人も来るし、これまでおそらくスポーツに触れたことないであろう障害のある方も来られたので、やはりユニバーサルなイメージっていうものを、イベントのネーミングなんかからも考えていって誰でも気軽に参加できるような空間作りっていうのを進めていただけるとありがたいかなというふうに思っております。以上です。

【事務局】

はい。花岡様、ありがとうございました。

次に野村様お願いいたします。

【野村 祐介様】

僕は精進料理醍醐の野村祐介と申します。

僕は皆様と違ってパラアスリートというよりは本当に一般の料理人として今思うと、2019年にパラ応援大使を仰せつかって、あれから6年近くたつのかなという形で、あのときは谷垣さんもおっしゃってましたけれど、僕もデフリンピックというのがパラリンピックと別個にあるということも知らないままいろいろお受けして、ゼロから見させていただいているところだったんですが、やっぱり今年の国際競技場を満席にした世界陸上や、あと僕はやっぱり実際見に行った女子バレーですねデフリンピックの。東京体育館でやりましたが、これ始まる前から列ができて、最終的に入れない方もいらっしゃったっていう状況に、やはり2019年から比べるとものすごい状況が変わったなということを切実に思いました。

これって障害者スポーツのみならず、あらゆるイベントでその集客ってかなり苦戦されてるものがあると思うんですね。

僕らみたいな飲食のイベントであつたりとか、音楽のイベントとかもそうだと思うんですが、集客というのにこれだけ一般的に苦戦する中であの状況を作れたというのは、もう本当に奇跡に近いぐらいの状況だと思います。

そんな中で、その経験を通していわゆるレガシーですね、ハード面でのレガシーというのはもちろんいっぱいあると思いますが、ソフト面でユニバーサルコミュニ

ケーションのことですとか、いわゆる透明ディスプレイとか、サインエールですね。

サインエールみたいなものが本当に一般的になってきたというのを感じますし、本当に0から1を生み出すようなことってというのは結構もうできてきたフェーズなのかなっていうふうに思うところもあって、これからその1をどういうふうに広げるかっていうことを考える。いわゆる今までやってきたメモリアルデーのようなものとかはコピペできるようなフォーマットにして、その新しくゼロから突き上がるリソースというのを外して、その余ったリソースでアップデートなり、新しいものを考えるということはもちろん重要だと思うんですが、本当に自然に落とし込んでいくっていうことがこれからのフェーズなんじゃないかなっていうのを強く感じました。

そうやって活動する中でも、やはり先ほど谷垣さんが好きってというのがスポーツの全てだということでおっしゃってました。

これ料理とかも多分そうで、中国の論語を僕思い出しまして、知好楽ってという言葉が結構僕、常に頭の中で考えてることなんですけど、やっぱり知ることによって好きだからこそ楽しくなる、楽しくなるともっと知りたくなって、もっと知るともっと好きになる。

こういうサイクルを作っていくことってやっぱり知ることから始まると思うので、今回のデフリンピックというものが一般的にもものすごく知られていたというわけではない状況の中で、これだけの集客というか、大成功を収めたということで、やっぱりPRというのは本当に大事なんだなということをすごく痛感しましたので、そういった学びとともに、私あの食ってというパートの仕事をしておりますので、令和5年8月の産業労働局さんのデータによると、例えばインバウンドのお客様の89.2%が食を楽しみに海外からいらっしゃっていて、2、3位にショッピングや散策と続くんですが、これのパーセンテージで51%とかなんですよ。

そうするとやっぱり1位の食に対するものってというのは圧倒的な数字で、例えばそれを楽しみに海外からいらっしゃってることを利用して、例えばパラスーツに対して少し食の食べることだけでなく、例えば給水するときに手を使わなくても給水できるドリンクホルダーとか。いろんなことを今既にあるとは思いますが、アップデートすることを考えたりとか、いろんな自分の経験とかパートを通して、これからいろいろ考えさせていただきたいなというふうに思いました。

【事務局】

はい。ありがとうございました。

それでは次に、高橋みなみ様よろしく願いいたします。

【高橋 みなみ様】

皆さんお久しぶりです。高橋みなみです。

世界陸上、デフリンピック、やはりリアルタイムで応援し楽しめるのは自国開催ならではのなというふうに思いましたし、日本人選手の活躍に心震えました。

この熱を次に繋げるように、やはりこうやって皆さんとお話できる場があるのは本当大事なことだなんていうふうに思っているんですが、先ほどからいろいろお話出てますけれども、先日駒沢公園で開催された東京 2025 デフリンピック、スポーツファンパークに大使の皆さんと一緒に視察に行かせていただいたんですけど、本当にデフバレーボールの観戦のための列が物すごかったんですよ。

本当にパラスポーツへの皆さんの関心の高さみたいなもののがとっても嬉しかったですし、イベントとしてふらっと立ち寄れる感じがなんかすごい良かったのかなっていうふうに思っていて、その応援ブースであったりスポーツ体験、キッチンカーもありましたし、やっぱ日本人ってお祭りすごい好きなんだなっていうふうに思いました。

あとやっぱイベントとして入場料無料っていうのがまたハードルを下げている要因なのかなっていうふうに思いましたね。

なんかやってるのは楽しそう、ちょっと行ってみよう。パラスポーツこういう面白いものやってるんだみたいなふうに繋がっていく、知るハードルを下げるという意味では、何かすごくいいイベントだったのかなっていうふうに思いますし、こういうイベント、お祭りっていうのが、この時期、このタイミングでこの場所で必ずやってるみたいなふうになると、皆さんの生活のルーティンの中に入ってくるのかなっていうふうに思って、こういう時期だけじゃなくてずっと続けて欲しいイベントだなんていうのをまず思いました。

あとやはりデフバレー観戦時のサインエールですね。

これやっぱり音ではなくその見える応援が会場全体を繋げるっていうのがすごく本当美しくて、何よりも応援をされている実感、応援をしている実感っていうのが結ばれていく感覚がすごく良かったなっていうふうに思いました。

先ほども体験させていただいたんですけど、やはりこう考えてくださった皆さんがいろんな工夫をしてくださっていたんだなっていうふうに思って、もっと広がってほしいなっていう、スポーツ TOKYO インフォメーション YouTube の方で多分いろいろ動画出たりもするんですけど、何かもっとないかなっていうふうに思いましたね。いろんな SNS もありますし。

私元アイドルですけども、いろんな音楽だったりとかいろんなものに合わせて振り付けとともに、それが入っている。これってサインエールだったみたいなふうに何か皆さんの中に生活の中であったりとか、すり込んでいくっていう、うまくそういうふうになっていけたらいいのかなっていうふうに思いました。

本当に今回の大会はすごい盛り上がっていて、すごい嬉しかったです。本当に繋がってほしいなというふうに思いました。はい、以上です。ありがとうございました。

【事務局】

はい。高橋みなみ様ありがとうございました。

次に根本様お願いいたします

【根本 慎志様】

皆さんお久しぶりです。はい。車いすバスケットボールの根本慎志です。

まず振り返りとして、世界陸上は残念ながら会場で見ることができなかったんですけど、もう皆さん知ってくれてるように日本中の学校に車いすバスケの体験授業ってやってた、まさにその期間日本中を駆け回ってたんですけども、もう行く先々の生徒たちに、世界陸上を見てる？って言ったらもうそれだけでも講演の前にもドーンと盛り上がって、やっぱり応援の力っていうものが改めて素晴らしいなっていうのでみんなが注目してるっていうことがわかりました。

その後、パラ応援大使の皆さんとデフバレー観戦させていただいたんですけども、とにかくサインエールがすごいなと思いましたね。

皆さん言われるように、やっぱり動きがあるっていうことで、選手はもちろん、それを見て多分自分を鼓舞するっていうことができたと思うんですけど、応援する側自身がやはり一体感が出るっていうのは、これは本当にもっともっといろんな場面で使えるものなんだろうなっていうことを多分皆さんが感じたのかなというふうに思いました。

エピソードで言うと、今日は出席できてないですけど萩本欽一大使がもう本当に、会場でそれを見てみんなでよりまたサインエールが盛り上がってるシーンであったり、本当に障害あるなし関係なしにみんなで一体感できるっていうものの応援の力っていうのを改めて知ることができました。

あとは先ほど一部の方で見させてもらった分身ロボット OriHime ですね。あれはすごいなっていうふうにみんなで話してたんですけども、やはりいろいろ障害があることによってなかなか移動ができなかったりする人たちが、体験じゃなくても分身ロボットを使って競技になってるんですよ。

これは本当にテクノロジーで今までできなかったもの、障害というふうにされたものが、ああいうテクノロジーを使うことで障害じゃなくなってくる、ますますスポーツの力っていうものが本当にこれから素晴らしいものになっていくのかなというふうにわかりました。

僕は2000年のシドニーパラリンピックに出場してるんですけども、実は生まれた年は1964年で東京パラリンピックなんですね。

そのパラリンピックあったからこそ、僕 18 で怪我をして車いすバスケがもう既に地元のチームがあって、やはりこれずっと繋がっていて、2000 年のときにはシドニーでこのパラリンピックあることによって、都市、国が変わっていくんだなっていうことを見て、そのときはまだ日本でこういうものがもしできたらすごいものになっというぐらいの感じ方しかなかったんですけど、それで東京で開催されて、世界陸上が開催されて、デフリンピックと全部やっぱり続いていたからこそ、この応援の力だったりテクノロジーをやはり開発していたからこそ、こういうものができたのかなと。

やはり正しく、スポーツって本当に社会を変える力があるんだなっていうことを誰もがもうわかったと思うので、引き続き今までのレガシーを使いながら社会を変えていく。

考えるとこのパラリンピックを 2 大会開催し、デフリンピックを開催している都市って世界で東京だけなんですよ。なんでも世界のリーダーシップの都市として社会を変えるっていうことをパラ応援大使の皆さんと活動できたらなというふうに思います。

【事務局】

はい。根木様ありがとうございました。

次に上原様お願いいたします。

【上原 大祐様】

パラアイスホッケーの上原です。皆さんこんにちは。

私、両方の大会、教育現場にいてパラスポーツとバリアフリーを推進していたことによって行けませんでした。残念ですけども。

こういった機会をやっぱり東京で作ってくださっていて本当にありがたいなと思うことと、この会が今も続いているということをすごく重要だと思いますので、ぜひ引き続きあの大会の機会、そしてこうやって皆さんとお話できる機会、そして皆さんと連携できる機会っていうのを継続させていただけたらなというふうに思っています。

その中で連携というところと言うと、一つ目で、特別支援学校と一緒に応援の力プロジェクトっていうので子供たちと一緒にイベントをさせていただいて、今子供たちが絵を書いているのを香取慎吾くんが一つの絵にしてそれをミラノに届けるみたいなプロジェクトをやるんですけども、こうした一般の学校だけじゃなくて特別支援学校の子たちに機会を届けてくださるっていうのってすごくありがたいし、ものすごい喜んでたんです。特に喜んでいたのはお母さんです。というところでいうと、ぜひ皆さん引き続きこういった特別支援学校の連携をしていけたらいいなと思っています。

次ですね、教育連携みたいなところで言うと私今東京都の教育庁の皆さんと一緒に都立高校をあちこち回るインクルーシブ教育プログラムを提供しております。うちのNPOに20~25くらい依頼が来ておりまして、いつもバタバタしておりますが、そのときにもぜひ大使の皆さんが私のプログラムのところに遊びに来ていただいて、あの現場ってどうなってるんだろうっていうのも見ていただける、そんな連携もできたらいいんじゃないかなと思いますし、先ほど見せていただいたデバイスあれも学校に持っていきたいんです。よろしくです。ありがとうございます。

あと、街って言うところでは、このバリアフリー化ハード面というところで、トイレ設置率が上がってるよってお話ありましたけれども、ここにユニバーサルベッドがあるか、ユニバーサルベッド設置率はどうなっているかといったところをぜひ知りたいです。

なぜならば、私達だけではなくてまさに特別支援学校の子供たちは、ユニバーサルベッドがないとなかなかお手洗いでできない人がいます。その結果、外に出られませんが、外に出られないとどうなるか、スポーツを見に行けません。なので、やっぱりこういったトイレと移動を整えることが、我々が目指すスポーツを楽しめる環境を作ると思いますので、ぜひユニバーサルベットのところを。

最後にやっぱりスポーツ施設、いくつか意見出ましたけれども、やっぱり未だに私も車いすはお断りって言われるところがございます。

私上原大祐が断られたらこのやろうと思いがいろいろと交渉するわけですが、例えば8歳の上原大祐が体育館貸してくださいって言って、大人に君は障害者だから借りられないんだよって言われたら、もう多分8歳の上原大祐2度と街に出たくないし、2度とスポーツしたくないんです。でもまだそんな環境です。ぜひ皆さん一緒にこの環境を変えていけたらいいなということです。

最後に、共生社会は私は共有社会から生まれると思っていて、いろんなことが楽しさだとか感動だとか嬉しさだとか、スポーツだとかそういうものを共有できる場所。そんなのが東京にたくさんたくさんできるといいんじゃないかなと思ってます。以上です。

【事務局】

はい。上原様ありがとうございました。

次に猪狩様お願いいたします。

【猪狩 ともか様】

はい。猪狩ともかです。よろしくお願いいたします。

私は今年世界陸上とデフリンピックの閉会式を見に行かせていただいたんですが、先ほど花岡さんもおっしゃっていたように2020大会のときは無観客でというのを経てのこのたくさんのお客さんがいる会場を見て、2020大会もこんなにお客

さんが入ったらよかったのになっていうすごく悔しい気持ちにもなりましたが、でもそれと同時にこれだけお客さんが集まる大会なんだなっていうのをすごく嬉しく思いました。

先ほどもスマートグラスを体験させていただきましたけれど、本当にドラえものの道具を手に入れたかのような高揚感がありまして、こんなに今テクノロジーってすごいんだなっていうのを感じて、それをスポーツを通じてどんどん日本の技術が進化していくんだなっていうのを感じました。世界陸上のときも、何か小さな車がやり投げの槍を運んでくれるのを見て本当にすごいなと思って、スポーツを通じてこうして最新のテクノロジーを見ることができて、世界大会でスポーツだけではなくっていろんなことを感じられるものだなっていうのを思いました。

そしてサインエールも先ほど一緒に体験しましたが、耳の聞こえない方にとってはいくら声援をこちらが届けたとしてもそれが聞こえてこないと応援としてなかなか受け取りづらいっていうのがあると思うので、それを視覚的に伝えられるっていうのはとても素晴らしいことだなと思いました。先ほど高橋さんもおっしゃってましたが、振り付けの中に手話が入っていたりとかそういうことも結構最近はいっぱいじゃないのかなと思うので、先ほどサインエールの皆さんもおっしゃっていたように、この一過性のものではなく、これからどんどん続いていくものとしてどんどん広まっていくといいなと思いましたし、その広めていくお手伝いちょっとでもいいのでこれからもやっていけたらいいなと思いました。これからもよろしくお願いします。

【事務局】

はい。猪狩様ありがとうございました。

次に高橋儀平様お願いいたします。

【高橋 儀平様】

東洋大学の高橋です。皆さん今日はありがとうございました。

やっぱり皆さんもおっしゃってましたが、こういう懇談会が続いているって多分他の国ではないんじゃないかという声、特にいろんな協議会の特にバリアフリー関係も含めてやってるっていうのは近隣でも近くのアジア諸国でもやってるところもいろいろありますけれども、そういう点ではですね、まずそういう場所に私もその一員として参加させていることにまず感謝申し上げたいと思います。ありがとうございます。

それから二つ目はですね、先ほど野村さんもそれから花岡さんもおっしゃってましたが、やっぱり自然に繋がれるっていうことがすごく重要ななというふうに思ってます。

先ほどスライドにもありましたけれども、私も開会式等に参加させていただいて国立競技場と、それから都立の東京体育館ですとかいくつかの施設にハード系の人間としてユニバーサルデザインとバリアフリー関係で改修に関わらせていただいたんですけれども、実際に本当に競技のときに入ったのは世界大会が初めてだったんですね。そのときに、それ以前はやはり無観客で入れなかったんですけれども、そういう点ではやっぱり生で様々なスポーツを、他の方もおっしゃってましたけれど、それを見るっていうことは、自分たちの力、どういう障害があろうがなかろうが関係なく自分たちの力に繋がっていくということは、私も年を重ねていますけれどもこの年になってもやっぱり感じますね。

やっぱり現場で見る、それが先ほどの話に戻すと自然に地域の学校だとか社会だとかあるいは職場環境だとか、そういうところに繋がっていくようなことがすごく重要なと思っています。

普段は東京都の仕事としては、東京都の福祉のまちづくり推進協議会というのがありまして、ハードもソフトも一緒に議論するんですけれども、そこに関わってます。

先ほども紹介されていましたが、達成としてはすごく数値的にはいいけれども、本当に都民の方々があるいは東京都に訪れる方々が使いやすく自然に気兼ねなく利用できる環境になっているかどうかということになると、やっぱりまだまだたくさんの意見が出てきます。

そういうことの意見について意識しながら、それが駄目ではなくて悪いのではなくてやっぱりそれを改善しようとしていく目標が皆さんと共通でないといけないので、ぜひこのパラスポーツあるいはバリアフリーの推進についての懇談会をさらに今後もですね、継続的に進めていただけると大変ありがたいなと思っています。ありがとうございました。

【事務局】

はい。高橋儀平様ありがとうございました。

続きまして谷垣名誉顧問からご意見を頂戴したいと思います。よろしくお願いいたします。

【谷垣 禎一様】

ありがとうございます。今皆様のご意見をいろいろ聞かせていただいて、いろいろお話の中にもありましたけれど、こういうそれぞれの方々の体験や今抱えられておられる問題を聞く機会っていうのは、あんまりなかったなというふうに思っております。

それで私自身も特にこのスポーツと障害の関係でいいますと、私も今こんな体ですからあんまり体を動かさなくてもすけれども、それでもスポーツと関与を持ってるのは昔学生の頃からやってた山の世界とは多少関係を現在もっております。

これはちょっと至らなかったなと思うのは、多分山でもいろいろその障害の程度によってできることできないことがあると思いますが、私実は山岳ガイド協会の会長という肩書きを持ってるんですが、果たしてやっぱり体の悪い方でも山に登りたいっていう方いらっしゃるに違いない。そこにどういう問題があって、まだあんまりいろいろそういうことが議論されてませんから、どうやって山に安全に登れるかっていうのは、あんまりその経験や知識が共有されてないことがあるんじゃないかと思います。

それから私は脊損ですが、脊損の患者の中でその治療法として山に登るっていう、それはもういろんなグレードの山がありますけれど、そういうことによって脊損の患者も少しでも歩く能力が開発できるようにやっているというそういう例もありますので、私がわかる範囲でもう少しそういうことも私自身も関心を持って、少しでもこの場所を広げていくっていうことをしなきゃいけないなと皆さんの話を聞いて感じました。ありがとうございました。

【事務局】

谷垣様ありがとうございました。

それでは最後に、座長の小池知事よりお願いいたします。

【小池知事】

皆様ご意見、また現場での困り事などもお伝えいただいて本当にありがとうございました。

パラリンピック、それから世界陸上、デフリンピックと立て続けと言えば立て続けでございましたけれども、でもそれが一つ一ついろいろな学びとなって、そしてそれによって現場がまた改善をされていくように繋がっていくこと、そのためにもこうやって懇談会を開いて大使の皆様方から率直なご意見を伺うということはとても重要だと改めて思ったところでございます。

あらゆる面でのバリアをいかにしてなくしていくのか、そしてその環境作り、これからの共生社会を目指す上で極めて重要でございます。

また、これからもインクルーシブなこの社会のための理念、そして私達が目指す社会の姿、広く皆様方を通じてですね、発信していただければと思います。

またそれによっていろんなリアクションがあって、またそれを学んでいきたいと思っております。いずれにしても本当にありがとうございます。

2度のパラリンピックとデフリンピックを開催した都市は世界で東京しかないと、このように自負しております。そして一つ一つが本当に充実した、困難もあり

ましたけれども充実したものになりまして、本当にこれが東京のレガシーになっていると思います。これからも共生社会の実現に向けた流れをさらに加速させていきたいと考えておりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。今日は皆様誠にありがとうございました。

【事務局】

はい、ありがとうございました。

以上をもちまして、第5回パラスポーツの振興とバリアフリー推進に向けた懇談会を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。